

特116

717

地拍子附
大小太鼓
笛手配附

七騎落

外十三ノ一



始



特116
717

八月
子方土肥速平
ツレ岡崎義實
ツレ土佐坊
ツレ源頼朝
シテ土肥實平
ツレ新開次郎
ツレ土屋三郎
ワツキ和田義盛

七騎落

四五番目(畧二卷)外三卷一



1086142

〔出ノ囃子〕 次第

止ノ打切

半声	ヨイ合	ヨイ合	ヨイ合
次第	剛吟	剛吟	剛吟
身	身	身	身
は	は	は	は
す	す	す	す
て	て	て	て
小	小	小	小
ぶ	ぶ	ぶ	ぶ
ね	ね	ね	ね
う	う	う	う
ら	ら	ら	ら
み	み	み	み
て	て	て	て
も	も	も	も
か	か	か	か

地取

大小鼓はアシライを打つ(ヨイ合) ヲキ

詞 頼朝 朗カニ
これは兵衛の佐頼朝とは我が事なり。さ

七騎落

ても昨日石橋山の合戦に身方うち負け。
 餘りに盡勢にゆ程に。まづ安房上総の方
 へ開かばやと存じゆ。いかに土肥の次郎
 前シテにゆ。餘りに身方盡勢にある間一
 まづ安房上総の方へ開かうずるにてある
 ぞ。急いで舟の事を申し付けゆへ。畏シテて
 ひ。とくより舟舟の事を申し付けて候。

急いで召されうずるにてゆ。いかに實平
 御前シテにゆ。唯今船中に供したる人数は
 いか程あるぞ。さんゆただ七騎の産伏
ツレさては頼朝までには八騎よな。きつと思ひ
 出だしたる事あり。祖父為義鎮西へ開き
 一時も主従八騎。父義朝江州へ落ち給
 ひ。も主従八騎。思へば不吉の例なり。矣

大將志

ト

コイ合 一 拍 二 拍 三 拍 四 拍 五 拍 六 拍 七 拍 八 拍

いづれをえらみかたさん。

さしものさねひらあおもひかね。

せきめんしたるばかりなり。

せきめんしたるばかりなり。

詞 いかに實平。何とて遅きぞ急いでおろし

ゆへ 畏つてゆいかに園崎殿に申しゆ急

いで御舟より御おりのゆへ 何と某に御舟

よりおりのよとゆや かなかの事 暫

くこの御供の内に。某一の老體にてゆ程

にかひがひしく法用にも立つまどき者と

に於ては御舟よりはおりに依まじ

いやさやうの儀にてはなくゆ。艦板に召

されてゆほどに。陸の近さに申し依

いや

七 崎 落

所詮この船中に命二つ持ちたらんずる
 者を御船よりおろされゆへシテこれは不思議
 議の事を承りゆものかな重シモリそれ人は生ず
 るより死するまで命をば一つこそ持ち
 てゆへ二つ持ちたる謂のゆかツツレ「さんい某
 も昨日までは命を二つ持ちてゆを確カリ早一
 つの命をば我が君に委らせ上げてゆ

シテ「さてその謂は伏ツツレ」その事にてゆ昨日石

橋山の合戦に子にて伏真田の与一義忠
 は副將軍を賜はり侯野と組んで討た
 れぬされば親子は一體二つの命ならずや
 見申せば土肥殿こそこの舟舟に親子一
 所に渡られゆへ重シ分残つて遠平をおろ
 すか遠平を残して分おるるか親子の

内一人おりにられゆへシテ シテ 花にて作。餘りの道

理にものなのたまひそ気ヲカハ確カリ いかは遠平。君よ

りの成後にてあるぞ。急いで侍舟より

おりゆへ子方 何と御舟よりおりよと作せゆ

かシテ シテ かなかの事急いでおり候へ子方 遠

平幼くゆとも。君の御大事に立たん事。

誰にかおりにゆべき。御舟より候おりまじ

くゆシテ シテ こざかき事を申す者かな。君の

御為父が命にてはなまきか運シテ 急いで御舟よ

りおりゆへ子方 いやいや君の御為父の命を

ば背くとも。侍舟より候おりまじくゆ

言シテ カツテ 確カ 道割の事を申すものかな。君の

侍為父が命をば背くともおりまじ

と申すか。手強ク勢ヲツケ その儀ならば人手には掛け

まどいぞ ツレ 暫く カケテ これは君の御門出なるに。

誤りたるか實平 シテ 何くまでも某が誤り

てゆ。所詮ありまどきと申す者をおろ

さんより。某侍舟よりありようずるにて

ゆ 子方 いかにも申し候。さらば某御舟よりお

りゆべし シテ 何とおありようずると申すか。

げにげに今こそ某が子にて候へ。あれを

見よ敵大勢討ち出でたり。かまへて某が子

と名の口で。尋常に討死せよ。名残こそ惜

しけれ カハル かくて我が子をおろし置き。實平

御舟に糸りけり 地 ちゆしく見ゆる實平

かなど。互の心を思ひやり。親子の別れ痛

しや 子方 父の別は申すに及ばず。君を始め

糸らせて。皆人々に御名残こそ惜しう

ゆへ

●小謡
●獨吟(奇切)

上歌地
●柔吟
●ヤア

かのま
松ア

つ浦

佐用

ひめ

か
〔Eカバ
高音〕

(ヨイ合)

ヤア

松ア

娘

五

(ヨイ合)

か

ろ

こ

し

ぶ

ね

き

した

ひ

俺

び

万々切

で

エ

な

ぎ

さ

トリ

和

(ヨイ合)

い

ま

と

ほ

ひ

ら

が

お

や

と

子

の

ラ

子ル

ヤア

者

本

トリ

有

様

一 拍

二 拍

三 拍

四 拍

五 拍

六 拍

七 拍

八 拍

万々切

み

な

な

み

だ

を

ぞ

な

が

し

け

る

万々切

ウ

キ

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

万々切

ウ

キ

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

(ヨイ合)

い

ば

し

と

だ

に

か

言

ひ

あ

へ

ず

あ

。

。

(ヨイ合)

ア

と

を

見

お

く

り

た

た

ず

め

ば

。

。

。

万々切

は

や

と

ほ

ぎ

か

る

う

ら

の

な

み

。

。

。

地

半声

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

上音

(ヨイ合) 子方
●柔吟
●上音

ち

ぎ

り

ほ

ど

な

ま

は

や

ぶ

ね

を

。

。

。

。

。

。

ウ

キ

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

拍

拍

拍

拍

拍

拍

拍

拍

拍

拍

拍

下音

上音

波

下音

上音

ワッセ

おちわかれ行くありさまを

ヨイ合 子方

餘のひそびとほこころで

ヨイ合 地

あはれみあへるふねのうち

ヨイ合

ひきさねひらははひたすらアに

カケ切

いっよわ新を見えエじとて

ワッセ

なかなかなかへり見おきもせ

下り

でいっさこころトリ

ワッセ

ろづつよくも行くあそび

ヨイ合

かたきおほせい見えたります

ワッセ

はやおほひらはは詩たるる

半声

てよよりそもあはれみく

ワッセ

がを見えたまへばアさすがげエに

半声

いおんあひトリ

ワッセ

のちきりもただいまをか

一拍 二拍 三拍 四拍 五拍 六拍 七拍 八拍

大崎落

一拍 二拍 三拍 四拍 五拍 六拍 七拍 八拍

ぎりーぞーとーおーもーひーさーねーひーらーはー。

いーそー邊ーにーむーかーひーひーとー知ーれーエーすー

ウー。こーこーろーのーまーまーなーらーばーあー

はーれーとーほーひーらーとーいーこー處ーにー。

うーちーじーせーばーやーとーあーこーがーれーてー。

飛ーびーまーつーばーかーりーにーおーもーひー子ーのー

わーかーれーぞーあーはーれーなーりーけーるーウー。

〔出ノ囃子〕

一聲 本越

半コイ合

一 聲 引張 舟の西の空。行くへ定めぬ。舟路かな

狂言 仲なる波の音までも。野の聲かど。恐し

わ 詞 あれに見えたるが。産舟にてあり

げにゆ。急いで舟を。漕ぎゆへ。畏めてゆ。

シテ いかに申しゆ。あれに兵船一艘見えてゆ。

七 崎 卷

まづこなたより詞ことばをかけうずるにてい

^{義實}然るべうツシ候ササリ シテ強ツシ大ササリキク シテいかにあれなる舟は誰が召

されたる御舟にていぞ ワキわれもそなたの

船影フネカゲを怪アヤしく思オモひ休やすらふなり。そも誰人タレヒト

の舟やらん シテこれは土肥とへの次郎つじろ実平まへひらが

乗りたる舟ふねよ ワキ何なにと土肥とへ殿どのの御舟おんふねとい

や シテなかなかの事こと。さてその御舟おんふねはたが

召よされたる舟ふねにていぞ ワキこれこそ和回わがの

小太郎こたろう義盛よしみが乗りたる船ふねよ シテさては

和田殿わだのの御舟おんふねにていぞ ワキなかなかの事こと。

内内ないない申し通とほせし如ごとく。御身おんみ方かたに乗りんた

めにこれまで乗まじていい。さて君きみはその舟ふね

にい座まいか シテ和回わがは内内ないない申し合あせたる事こと

のい間ま。唯ただ今いま乗まりていい。さりながら。まづたば

かつて心をえんうずるにてゆ。いかに和田殿
へ申しゆ。これまでの御系りめでたうゆ
ざりながら。面目もなき事のゆ。昨日の言
ほどより我が君をえ失ひ申し。かやうに
浮かれ舟となりて尋ね申しゆよ。何と
君はその御舟に居座なきとばや。さん
伏フキ言語道断カシテ確カリの事にてゆものかな。われ

身方をば忍び出で。月日とも頼み存る頼
朝には難れ申し。この上は命ありても
何かせん。いでいで自害に及ばんと。腰の刀
に手を掛くる。ああ暫く。君はこの舟に
居座ゆ。何と君はその御舟に居座伏と
や。なかなかの事。さて何とてかやうに
は承りゆぞ。これは戯事にて伏。幸陸近

ういほどに。その舟をも寄せられゆへ。舟
 舟をも寄せ候ひて。陸にては對面あら
 うずるにては ワキ心得申し候。さらばやが
 て陸へ来らうずるにては シテいかにも申し候
 浪前にて候 ワキ我が君を見たりて。今は
 安堵仕りては シテけにげにむにては ワキいか
 に土肥殿に申し候 シテ何事にて候ぞ

ワキこの御供の内に。何とて侍子息遠平は
 侍入りゆらはぬぞ シテその事にて候。さる
 謂あつて陸に残し置きては ワキとくより
 かくと申し度くはゆひつれども。以前某
 に心をつくさせられゆ。その返報に。今ま
 ではかくとも申さぬなり。 確カリいで土肥殿に
 引出物中さんと。隠し置きたる舟底よ

まで伴トモひ申ししたるイワレ禰ネを。赤アカ前ゼンにて申
 し上げうずるにていシテ急カツキいで御物オンモノ語り
 けへフキ語カきても昨日キナ石橋山イシハシの合戦カゼン破れヤブか
 ば。大庭オホニが手勢テセ君キミを討ウチち存ゾクらんと。大勢オホセ
 渚ナギサに打ウチち出デでたりしに。某ナニも一ヒト所トコロに討ウチ
 て出デでーが。汀シギハを見れば。引ヒキきかねたる若
 武者ムシウヂ一ヒト騎カひかへたり。某ナニ駒ウマかけよせて見

ればシば子シ息ノ遠トホ平ヘなり。急カツキぎ馬ウマより飛
 んで下スり。生ナけ捕トる體テにもてなしフ身ミ感カン
 へのせ中ナカし。これまで伴トモひ集ツりたり。ヒトマカなん
 ぼう土肥ツチノヘ殿ノに義盛ヨシノブは忠チカの者モノにていぞ
 小シテ聞かカる有ア難ガき事コトこそいハね。唯タ今イマの所トコロ
 物語モノガタリを聞キきいヒて落ラク涙ナミダ仕シりていハを。さ
 ぞ人ヒトぐの不フ覚カの涙ナミダとや思オモし召メらんサり

●切まで
唯子

二奇事

一

一 拍
二 拍
三 拍
四 拍
五 拍
六 拍
七 拍
八 拍

(二段目)

ウ

キヲロシ

カ

ア

ク

ク

ク

テ

ト

時

ト

じ

ト

目

(地)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

ラ

ア

ト

さ

ア

ト

ず

(高利)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

の

ト

つ

兵

わ

ト

も

(地)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

の

ト

つ

兵

わ

ト

も

(四段目)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

の

ト

ず

ト

れ

ト

ば

(シカケ)

ア

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

な

ト

お

御

ん

ト

せ

(奇カケ)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

ふ

ト

ま

萬

ん

ト

騎

(奇通)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

な

ト

お

御

ん

ト

せ

(コス及)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

ま

ト

お

御

ん

ト

つ

(ヲロス)

ウ

キヲロシ

カ

エ

ク

ク

ク

ま

ト

お

御

ん

ト

つ

(奇通)

ウ

キヲロシ

カ

ナ

ト

ク

ク

ク

コ

ト

ク

ト

ク

ク

(地)

イ

キヲロシ

カ

ナ

ト

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(地)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(地)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(ヲロス)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(シカケ)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(高利)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(奇カケ)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(タム及)

イ

キヲロシ

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

(下ヤ高音)

カ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

七 奇音

トニ冬

終

